
退官に寄せて

つねにフロントであり続ける井上先生

原田由美子

高齢化の問題は、早くから認識されていたが、基盤整備が整う暇もなく、早くも超高齢社会を迎えてしまった。

高度成長期を経て、都市部への人口の集中と核家族化、単身者の増加、女性の労働市場への参入など、家庭機能の著しい低下が明らかとなった。これらに高齢化の進行が加わり、必然として、家庭から乳幼児の養育と親の介護の機能を外部化させる結果となった。好むと好まざるに関わらず、「親の介護を、自らの介護をどうするのか」という介護をめぐる問題は、遅かれ早かれ誰も避けては通れない問題になったのである。

そして今、近未来の少子高齢人口減少社会を推計する数字を前にして、「安心して老いる場はどこですか」と問うても、納得し安心できるような答えはだれもだせないままである。

ところで、先生は、教師から福祉の分野に軸足を移し、介護の現場において常にフロントとして活躍してこられた。時おりしも1962年に国庫補助事業となった家庭奉仕員制度が、翌年老人福祉法に規定され、1989年の福祉八法の改正と高齢者保健福祉計画の策定により、ホームヘルパーの存在も、徐々に社会的に周知されるようになったところである。

一旦は公務労働として量的拡大に向けたものの財源の確保の困難さから、税による政策から「高齢者介護を社会で支える」として介護保険制度が発足し、企業労働も加わり今日に至った。

介護をめぐる諸課題は、これまで概ね三つの観点から語られてきた。一つは、介護を受ける立場から、二つは、介護を提供する側から、三つ目は、政策的視点からであ

る。介護を政策の立場から論じてきた者の多くは、介護を家庭のシャドウワークの延長線上に置き、コストを切り下げするため、介護労働の主力として「主婦のパート労働」をおいて、補完としてボランティアを想定した。

このような流れに抗して、井上先生は、介護を担う人材の養成と専門職としての位置づけを確かなものにするために、人生の大半の時間と情熱を傾けてこられたのだと思う。

介護をめぐる現場に身をおいてこられた井上先生の「前に道なく、後に道ができる」おそらくそのような職業人生を歩んでこられたのではないだろうか。はじめは介護の現場の最前線で、次に後進を育てる側に身を置いて。その総仕上げとして、4年制大学で介護福祉士を養成し、更に大学院で学ぶ場を用意し、現場から介護に関わる研究や介護政策を提言できる人材を養成することに取り組んでこられた。

一番々瀬康子先生は、生前に「介護保障は人権保障の総仕上げである」と語っておられた。まさに本学の教育目標である「主体的に認知する力、創造的に協働しつつ、自ら課題を発見し、高い倫理観と責任感をもって想定外の対して立ち向かえる人材」によって育った学生たちは、介護の現場において、政策を企画する場において、その力を発揮し、人権保障の総仕上げに資するとともに、その基盤づくりに取り組んでこられた井上先生の後に続く人材に成長してくれると信じている。

井上先生、お疲れさまでした。そして、もうひとふんばり、介護と京女の未来のために！